

エッセイ 古本屋の仕事場⑨

## 日本人は物持ちがよい？

橋口 侯之介（誠心堂書店）

### S 世界一の残存文書数

最近読んだ伊藤正敏氏の『無縁所の中世』（ちくま新書、二〇一〇年）にこんな記述があった。

「近年国際交流が進み、各国の文書事情が明らかになってきた。ちよつと意外なことであるが、残存文書の絶対数はヨーロッパ各国よりも、中国全土よりも、日本の方が多いことがわかってきた」

どのような調査でわかったのか不明だが、前近代の史料という点でいえば実感としては理解できる。日本では中世文書の大半が寺院で保管されてきており、寺社史料が豊富である。近世にいたっては地方文書じかたがいくらでもある。今でも段ボール箱にぎっしりと詰まった各地の民間の史料が大量に古書市場に出てくる。旧家が家の建て直しをすると必ず蔵の中から出てくるのだ。多くは江戸時代の後半からの庄屋あるいはそれに準ずる家の書類である。藩や公儀に提出する文書の写し、金銭の出納や貸借などの記録だ。家が倒壊するような大きな地震があったあとには、

必ずといってよいほどその地域から多く出てくる。

これらは地元の公文書館や資料館などがある程度受け入れていると思いが、何らかの形で保存されればよいほうで、おそらく大半は廃棄されてしまったと思われる。古書の市場に出てくるのは、それでも幸運な文書たちである。

どこかでこうした「歴史的な史料は公共のものであり、値段をつけて売買するとはけしからん」というようなことを書いておられる学者の文を読んだことがある。すべての文書がしかるべき機関に保存されれば（買上げるのでなく寄付しろということだろう）、それは間違った意見ではないだろうが、現実的ではない。旧家をこわして新築する人にとって、「じゃまな紙クズ」としかみえない文書類をどうすればいいだろう。教育委員会に連絡して指示を仰ぐのだろうか。考古学の遺跡のように法律で義務づけられたことなら対応するだろうが、無数にある文書については無理だろう。

古書の市場に地方文書が出てくるのは、そうした所有者が古本屋を呼んで処分したのではなく、骨董屋がきて陶磁器や家具、書画などといったよに持っていったのである。だからこうした本や文書の類はまず骨董の市場に出てくる。それを各地の骨董市をまわっている本屋が見つけてきて古書市場に持ってくる。村や町の隅々まで入り込んでいく骨董屋ならではの仕事があればこそ生き残ったのだ。最終的な取引市場である古書市場で値段にならなければ、以後は回ってこなくなる。値段がつくか

ら骨董屋も持っていくし、文書も生き残れるという道理が大事なのだ。

近世に関する限り、まだまだ潜在的に多数の文書が民間にあり、現状ではそれを収納保管する公共機関の能力にも限界がある。まして、それらを整理して読み込む作業など百年たつても終わらないだろう。

### § 和本の残存数も計れるか？

それほど「豊富な」史料群だけでなく、これを書籍に置き換えて国際比較調査をするのもおもしろいと思う。前近代の書籍（ようするに和本）の残存度の高さはつとに実感していることであり、おそらく文書同様の結果となると思う。

わたしたちの大先輩である反町茂雄さんは世界中の書籍に造詣が深かったが、その経験で日本は古い書籍の残存度が非常に高いことを何度も力説されている。ただ、その学問的な根拠がなかなか示せないのだ。

たんなる出版点数の統計ではない。それらが写本も含めてどれだけ残っているかを数えなければならない。図書館・文書館などの機関の蔵書数だけをとりあげて比較しても実態を示さない。ヨーロッパでは古い本は図書館・文書館が充実していることもあってよく保存されている。その蔵書数だけを国別に比較すると日本より多いところもあるだろう。しかし、それだけでは残存書籍数の統計には意味を持たせられない。民間にどれだけ残されているかを含めて考えないとたしかな数字にならないからだ。

日本では公的な図書館・博物館と個人の間には、寺社、各種私的な博物館や文庫、専門図書館などが多く存在しその保管数も多く、そもそもその全体像すらつかめていない。NACSIS Webcatという大学図書館を中心とした蔵書のデータベースがあつて約九百万件と充実しているが、あくまでも大学図書館が中心である。国会図書館のJAPAN MARCが四百五十万件、さらに公共図書館などは個別にデータベースを持っている。しかし、データの管理などおぼつかないところのほうが多い。あるいは大半が個別に公開しているだけである。

国立情報学研究所の高野明彦教授によってWebcat Plusという図書館だけでなく古書店の在庫（「日本の古本屋」）まで含めて日本全体の蔵書を串刺しにして検索できることを理想としたシステムが構築されつつあるが、まだ始まったばかりだ。このシステムのおもしろいところは、単純な検索だけでなく、関連する本までいっしょに見つけ出す「連想検索」ができるところにある。旧来の分類主義で探してもみつからない本が出てきたりする。ネット社会にも問題はあがあるが、これまでばらばらに存在していたものを関連で調べること、新たな情報の切り出し方ができるようになってきたことには意義がある。

各所蔵の公開が進み、このシステムが機能すると、その中から近代以降の書籍や外国書を除いて和本類だけをカウントするとある程度本の残存度が計れる。まだ個人が所蔵する全体像は無理としても、一定の推定値が出るだろう。この中に「日本の古本屋」のデータが入るからだ。

個人の蔵書など調べようもないのだが、その一部の顕在化したのが古書店の在庫である。それである程度想像がつく。

古書店の世界的な連合組織としてIAB(国際古書籍商連盟)があつて、その加盟店は各国の指導的な店である。たんなる *Secondhand Books* の店とは区分されている。そこでは *Antiquarian Books* はたしかに充実している。しかし、稀覯本とは要するに数が少ないから価値のある本であつて、それがいくら充実していても全体の書籍残存数を調べる根拠にならない。その点、日本では古書店に区分けがないので、大小さまざまな書店が組織に入っている。その加盟店は全国で二千軒を超えており(それでもだいぶ減ってきている)、その総合データベース型インターネット販売の場である「日本の古本屋」には現在七百万点の古本が登録されている。和本はその中の二、三%程度だが、それでも2%なら十四万点である。統計的な全体像はむりにしても、その多さの想像がつくだろう。

### § 本を残す寺院の役割

日本人がよく本を残す背景にある書物観に対して私はつねに興味を抱いている。とくに和本のそれを探っていけば、日本人にとって本とは何かがつきとめられていくと思つている。

そういう視点で見ると、歴史的には本を伝存させていくということについて公家と寺社の役割が大変大きいことに気づく。冷泉家にいまも藤原定家の自筆本を初めとする古い典籍が伝わっているように、公家の本

の残し方はすごい。宮内庁の書陵部には数十万巻に達する旧公家の記録類が残つているという。未公開のものも多く、その修復にまだ数十年かかるのだとか。

それ以上に全国の寺社の役割の大きさに驚く。質量とも実は寺社の書物が圧倒的に多いのだ。それは文書史料の残存と並行している。中世の寺院にはしっかりと階層があつて、その頂点に親王や公卿出身の学侶がくりよと呼ばれるエリートがおり、その下に武家出身の一般僧がいてここまで僧侶といい、読み書きの能力(リテラシー)があつた。それが書物と学問を伝えた。院政時代からだとして五百年の長きにわたって続けられてきた。

このことをわたしたち古書店は実感をもつて首肯することができるといふ最近も、ふだんの何気ない市場に平安時代の聖教しやうぎやうが出てきた。経典の本文でなく、仏教に関する論などを概して聖教というが、中世のものならもつとよく出てくる。市場に出たのは、たしかに平安時代中頃の年代の識語があり、装訂も横本の小ぶりの粘葉装だった。もう少し後の写しかもしれないが、いずれにしる古い。もしこれが物語の断片だったら文化財級で数千万円はするだろう。しかし、聖教なので需要も限られているからだろうか、思つたより安かつた。

もつと古い奈良時代の古写経も平気な顔をして古書市場に出てくる。「大般若波羅蜜多経」巻いくつとつというところなら珍しくない。黄麻紙で首尾一貫して元々の装訂を維持していれば高いが、どこかに欠点があると、

そんなもの？という値段にしかない。古さの桁が違うのだが、古いだけでは価値が出るわけではないことに、わかっている感覚が麻痺してしまう。

それは寺院が經典と聖教共々よく保存してきたからだ。京都や南都の大寺院だけでなく地方の寺院でも同じである。栄枯盛衰の激しい武家ではなく、相対的に権力の介入を受けにくい寺社で書物の伝存がなされてきた。寺院でももし火災があれば、仏像と書物はまっさきに避難した。経蔵には、小ぶりの櫃に本が納められていたそう。それは、火災やさまざまな変事に備えて人が容易に運び出せる大きさにしたためだ。

物持ちがよいというだけでなく、書物をつくり育てる仕事も要するに寺院の仕事だった。インターネットで検索できる「日本古籍総合目録」で中世の分をサンプル抽出してみた。室町時代半ばを過ぎると連歌などが盛んになることもあってその割合は四割程度に減るが、鎌倉から南北朝時代などは六割以上が仏書である。公家や武家の記録類が二割程度でそれに続く。

じつは江戸時代の前期（おおむね十七世紀末まで）でも出版書籍の点数の中で仏教関係書の占める割合は高かった。たとえば、本号の目録にも載せた寛文十一年（一六七二）刊後修本の『新板増補書籍目録』は当時の分類意識で並べたものだが、本文百七十丁のうち七十丁までが仏書で、以下、儒書三十丁、医書十丁、仮名・和書（和歌・物語・連歌を含む）二十一丁などとなっている。仏書の占める割合はまだ四十%にもなるの

だ。それが江戸時代後期になると、たとえば町版の出版書目になる『割印帳』での仏教関係書の割合は、5%にもみたなくなる。この間にどのような変化があったとみるべきだろうか。

いずれにしろ日本が仏教国だったことを再認識させるものだ。日本人と書物を論ずるなら、この仏教との関係をもっと重視しないと偏ったものになってしまう。

さらに中世の寺院の末端に各寺社に出入りする聖や神人がいた。彼らはいわば放浪民であり、商人でもあり芸能者でもあった。それが唱導文学を伝えたことも重要だ。軍記物ができ、室町時代にはお伽草子も増えていく。これらは舞踊りや音楽の演奏とともに放浪した旅芸人の語りで伝えられ、文字になるのはずっと後である。ごく一部が絵巻物などになったりただけだった。江戸時代に入ると浄瑠璃が盛んになることで、これらがいつきよに印刷物となった。本を特定の形だけで見てしまうと語りは書物ではないことになってしまうが、コンテンツとして考えればずっと継承して伝えられ、数百年の命脈を保ったのだった。これも広義の寺社の活動のうちである。

いま、もし書物を手にする喜びを感じるなら、この中世の間の書物観と実際の伝存の仕事にもっと敬意と感謝の念を持つべきだろう。ついつい中世は写本の時代、近世が印刷物の時代、そこに「発展」があったと考えがちだが、つねに連続しており、変わらずに日本人の心の中に生き続けてきたものである。